

IP監視カメラシステム

見えてきた600万アナログ更新需要

ネットワークカメラ市場の伸びに弾みが付いてきた。これを牽引するのが用途の拡大と低価格化だ。アナログカメラ600万台のリプレース需要が、いよいよ見えてきた。

文◎藤井宏治 (IT通信ジャーナリスト)

「売れる商材が見つからない」といった声も聞かれるIT／ネットワークソリューションの中で、着実に販売数を伸ばしてきたのが「IP監視カメラシステム」だ。

調査会社である富士経済の推計では、ネットワークカメラの2011年の売り上げは前年比約2割、録画装置(NVR)も3割程伸びたと見られている。今年に入って、このペースが、さらに加速し始めた。

ネットワークカメラ世界トップ、日本でも2位に付けるスウェーデンのアクシスコミュニケーションズ、シニアマーケティングマネージャーの佐藤秀一氏は、「昨年は市場と同程度の伸びが確保できた。リーマンショック後の落ちこみから完全に脱し、成長カーブに乗ろうとしている」と話す。録画・管理ソフト「ArobaView」で国内

トップのルクレも好調だ。コーポレートビジネス部マネージャーの山本真司氏によれば「昨年比で30%以上伸びているなか、年明けからはさらに案件数も増えてきている」という。

ネットワークカメラを用いたIP監視カメラシステムは、従来のアナログ型システムに比べ、①配線が簡素化できるため大規模な案件では設備コストが安く済む、②映像の蓄積や活用が容易であるなどの利点を生かし、着実にマーケットを広げてきた。近年は企業のセキュリティ意識の高まりから、新築のオフィスビルではほぼネットワークカメラが導入される状況となっている。高機能化による用途拡大も市場伸長の大きな要因だ。

もう1つ見のがせないのが、ネットワークカメラの低価格化だ。これに伴い、未だにアナログ監視カメラの

割合が圧倒的である中小規模システムにも導入されるケースが出てきた。これも販売を底上げしているのだ。

本稿では、こうしたIP監視カメラ市場の変化を、「A.高精細化／高機能化」「B.高付加価値化」「C.低廉化」の3つの側面から見ていく。

フルHDの展開が本格化

まず、「高精細化／高機能化」におけるトピックは、フルHD(1080p)対応機の展開が本格化してきたことだ。ハイビジョンテレビ規格の最高画質(1920×1080ピクセル、200万画素相当)を監視カメラで実現するものだ。

一般的なネットワークカメラのSD画質(30万画素相当)の5倍以上の情報がディスプレイに表示されるので、多くの人が集まるスタジアムの監視など新たな用途にも対応できる。

フルHDカメラは、三洋電機が2009年末、ソニーは2010年から製品を展開している。これまで投入を見送ってきた主要メーカーも、今年に入って相次いで対応機をリリースした。

業界最大手のパナソニック システムネットワークスは、3月にボックスタイプの「DG-SP509」とドームタイプの「DG-SW559」の2機種をi-proシリーズのフラッグシップ機として投入した。

JVCケンウッドも3月にドーム型の「VN-H237」、レンズ一体型「VN-H137」の2機種を投入。4月に耐衝



パナソニックがi-proシリーズのフラッグシップモデルとして3月に発売したフルHDネットワークカメラ「DG-SP509」(左)「DG-SW559」(右)。SW559はIP66対応の防水、防塵仕様